

相互評価コメントを取り入れた国語科授業の開発

—「有効なコメント」を引き出すための小・中学校での取り組み—

西村 尚久 杉川 千草 長岡 康治 田代 健太郎 山元 隆春 佐々木 勇

Abstract: In Japanese language classes at elementary and junior high schools, we practiced a method for students to evaluate each other using "valid comments" in the course of writing. By having students think about "effective comments" on their own, they were able to realize high quality peer evaluation.

1. はじめに

国語科において、児童・生徒同士が作文を交流し、コメントをしあって推敲に生かすという実践は、古くから行われている。また近年においては、その実践方法も多様化している。GIGAスクール構想によって、一人一台の端末と高速大容量通信が各学校で整備されたことにより、コンピューター端末を介した作文の交流、相互評価コメントのやりとりが可能になり、その実践についても複数の報告がある（西村ら2021）（田中2022）。

コンピューター端末を介した作文の交流には、紙ベースの作文の交流にはなかった利点がある。例えば、学級や班などの物理的な制約がなく、さまざまな学習者と自由に交流が出来る。また、相互評価コメントがデジタルデータとして残るため保存性がよく、いつでも参照できる。さらに、有木ら（2018）は、中学校・高等学校国語科におけるコンピューター端末を介した相互評価の実践報告を通して、次のように述べている。「書き手本人が読み手＝評価者の前に姿を現している必要はない。このやり方では、評価者の意識を書かれた文章の読解に向け、読解を通じて書き手の意図や感情などを推測・想像し、それに対して何らかの判断を行うことになるため、生身の人間としての書き手に対するイメージに左右されにくくなる点で、言語の学習としてメリットがあると考えられる。」このように、コンピューター端末を介した作文の交流には、さまざまな利点があることが認知されつつあり、今後も実践が広がっていくものと考えてい

る。

その一方で、生徒が作文の交流をするとき、そのコメントの質について、十分な検討が加えられているかは疑問がある。これまで、紙・コンピューターのメディアを問わず、生徒の相互評価の実践を行ってきたものの、児童・生徒にどのような相互評価コメントをさせればよいのか、明確な判断基準を持つことができていない。

このような問題意識を発端とし、2022年度から広島大学学部附属共同研究で共同研究を続けてきた。

研究を進める中で、相互評価コメントにおける「有効なコメント」を「文章を修正するためのきっかけになるもの」だけでなく、「文章を書く意欲につながるもの」なども含めることとした。

2. 研究の目的・方法

本研究の目的は、前述したように、国語科の授業を行う上で、相互評価を行う場面で「有効なコメント」をいかに引き出すか、というものである。目的を達成するための方法として、児童・生徒が「有効なコメント」に必要な条件について考え、共有し、その条件を踏まえながら相互評価コメントを実際に行い、「有効なコメント」に必要な要素について再検討をすることを通し、「有効なコメント」を導いていくことができると考えた。

3. 授業の実際

上記の手立てを講じた小学校1年生、2年

Takahisa Nishimura, Chigusa Sugikawa, Koji Nagaoka, Kentaro Tashiro, Takaharu Yamamoto, Isamu Sasaki :

Development of Japanese language classes incorporating mutual evaluation comments : Efforts at elementary and junior high schools to elicit "valid comments".

生、及び中学校1年生を対象とした実践を整理し、そこから見出した成果と課題を報告する。

(1) 小学校1年生「じゅんじょよくかこう」の授業実践

① 単元について

本単元は、国語科の作文単元「じゅんじょよくかこう」を生活科「じぶんでできるよ」と関連させて行ったものである。読み手によくわかるように、順序に沿ってつながりのある文章を書くことを主なねらいとしている。そこで、「はじめに」「つぎに」「それから」「さいごに」といった順序をあらわす接続語を使いながらしたことや思ったことを整理し、順序に沿って書いていくことができるようにする。

② 単元の目標

自分がしたお手伝いを題材にして、事柄の順序に沿って簡単な構成を考え、必要な事柄を集めたり確かめたりしながら文章を書くことができるようにする。

③ 単元の計画（国語科7時間、生活科課外）

第1次 じぶんでできることをやろう（1回目）
（生活科、家庭での実践）

第2次 おてつだいをしたよ……………3時間
・おてつだいのさく文をかこう（1）
・あやかさんのさく文から学ぼう（1）
・おたがいのさく文をよみあおう（1）

第3次 じぶんでできることをやろう（2回目）
（生活科、家庭での実践）

第4次 おてつだいをしたよ……………4時間
・学んだことを生かしておてつだいのさく文をかこう（3）
・ふりかえりをしよう（1）

④ 授業の実際

ア. じぶんでできることをやろう（1回目）

生活科の学習で、自分が家で取り組むことを決め、自分の役割を果たそうとすることを目指して、各家庭でお手伝いに取り組ませた。

イ. おてつだいのさく文をかこう

生活科の学習で各自が取り組んだお手伝いについての作文を、まず何も指導せずに作文用紙1枚程度に書かせた。

ウ. 教科書の作文例から学ぶ。

「おふろそうじって気持ちがいいな」という教科書（学校図書1年）の作文例を読み、いいなと思うところを見つけて交流した。

その後、題名を工夫すること、順序を表す言葉を用いること、様子や感じたこと・考えたこ

となどを書くことが、文章をわかりやすくするために大切であることを確認した。

エ. おたがいのさく文をよみあおう

生活班の4名でお互いの作文を読み合い、感想や質問、アドバイスの形でコメントを書かせた。

おさらあらいをしたよ A 児
ぼくは、土曜日におかあさんとおさらあらいをしました。はじめてだからちょっとどきどきしました。はじめたらスポンジみたいなのをぬらしました。つめたかったです。やったらすこしたのしかったのでまたやりたいです。いっぱいおさらをあらったらなれてきてたのしかったです。そして、たのしかったからいっぱいやりました。やるのがはじめてだからできるかなだいじょうぶかなとおもってたけど、じょうずにできたのでうれしかったです。

図1 A 児の第1次作文

上記のA 児の第1次作文に対して、班の児童は、次のようなコメントを書いた

・おさらはなんまいあらったのですか。
・はじめてだったらひらたいおさらがあらやすいです。
・スポンジみたいなのはどんぐらいつめたかったの。たのしかつたらもつといろいろなことおもったことがかけるといいかもね。

図2 A 児がもらったコメント

オ. じぶんでできることをやろう（2回目）

生活科の学習で、1回目よりもレベルアップすることを目指して、2回目のお手伝いに取り組ませた。

カ. 学んだことを生かしておてつだいのさく文をかこう

第2次作文を書くにあたり、お手伝いの内容を「はじめに」「つぎに」「それから」「さいごに」という「したことの順序」と「様子・気づいたこと・思ったこと・感じたことなど」を対応させて表に整理させた。その後、教科書の作文で学んだことと、友達からもらったコメントの内容を生かしながら、第2次作文を書かせた。

おさらあらいはたのしいな A 児
ぼくは、土よう日におかあさんとおさら
あらいをしました。はじめてだからちょっ
とどきどきしました。

はじめに、スポンジをぬらしてせんざい
をつけました。つめたかったです。おかあさ
んがいつもこんなにがんばっているから、
すごいとおもいました。

つぎに、おさらをあらいました。ぼくが
やったらすごくおそかったけど、おかあさ
んがやったらすごくはやかかったです。

それから、たのしくなってきたからいっ
ぱいやりました。じょうずになったらいっ
ぱいおさらがあってもすぐにおわったので
うれしかったです。いっぱいおさらをあ
らったら、なれてきてたのしかったです。

さいごに、おさらをふいたら、おかあさん
とおとうさんが、
「よくやったね。」
とってくれました。

はじめてだからできるかな、だいじょう
ぶかなとおもっていたけど、じょうずにで
きたのでうれしかったです。これからもつ
づけようとおもいます。

図3 A 児の第2次作文

全員が2～3枚の作文用紙に、順序を表す言
葉を用いながら、したことと様子や感じたこと・
考えたことなどを書くことができた。

キ. ふりかえりをしよう

第2次作文を各自で読み返し、第1次よりも
レベルアップできたかどうか、友達からもらっ
たどのコメントが役立ったか、どのコメントが
もらってうれしかったかについて、アンケート
で尋ねた。

⑤実践を振り返って

自分の作文をレベルアップさせるために役
立ったコメントとしては、感想13名、質問18名、
アドバイス16名で、感想よりも質問・アドバ
イスを挙げた児童が多かった。その理由は次の通
りである。

- ・かんがえがふえて、さく文がいっぱいかけた。
- ・ぼくがかいていないことをしつもんしてくれ
た。
- ・しつもんをされると、それを生かして文しよ
うがながくなる。
- ・〇〇さんのいうとおり、ふかくかかないとよ

む人につたわらない。

- ・アドバイスがつぎにやるときにつかえる。
- ・(誤字を指摘してくれた友達に) 〇〇さん、あ
りがとう。

一方、もらってうれしかったコメントとして
は、感想18名、質問11名、アドバイス10名と質
問・アドバイスよりも感想を挙げた児童が多
かった。その理由は、次の通りである。

- ・いいねがいっばいで、いい気持ちになった。
- ・わたしがふつうのことだとおもったことを、
ほめてくれた。
- ・ほめられるとがんばれる。
- ・「〇〇ちゃんはたのしかったからよかったね」
というところが、とてもやさしいことばだった。
- ・よんでくれてうれしかった。

題材がお手伝いだったので、お手伝いの内容
についてほめてもらったことも、作文を書くた
めの意欲の向上につながったようだ。

今回、小学校1年生の児童に作文を読み合う
ことを初めて経験させたが、お互いの作文を真
剣に読み合い、コミュニケーションを取りなが
ら、一生懸命コメントを書き合う姿が印象的
だった。上学年での展開が期待される。

(2) 小学校2年生「今の自分を詩にあわらそ
う」の授業実践

①単元について

小学校低学年では、長い文章をお互いが読ん
でコメントし、それぞれについて推敲すること
は難しいと考える。そこで、想像力あふれる低
学年だからこそ、詩を書き、それを相互で読み
合う活動を行うことで、それぞれの形式や内容
のよさへの気付きが得られ、自ら作成した詩へ
もその気付きが生かされるのではないかと仮定
し、実践を行った。

②単元の目標

学習指導要領では、「第1学年及び第2学年
では、文章を読み返す習慣を付けるとともに、
間違いを正したり、語と語や文と文との続き方
を確かめたりすること」と示されている。文章
を読み返すことで、自ら間違いを正すようにな
り、語と語や文と文との続き方を確かめられる
ようになることは大切だが、それだけではなく、
相互評価コメントを行うよさを児童に体得させ
たい。

③単元の計画(全6時間)

第1次 教科書の詩を読み、詩を作成する

…… 2時間

- 第2次 相互評価コメントを行う…………… 1時間
- 第3次 コメントを読み，推敲する…………… 1時間
- 第4次 コメントを分類し，もう一度推敲して清書を書く…………… 1時間
- 第5次 振り返り…………… 1時間

④授業の実際

ア．教科書の詩を読み，詩を作成する

教科書（学校図書2年）「いちばんぼし」と「山」，「おふろそうじをしたよ」の3つの詩を一緒に読み，その中から一番好きな詩を選び，それぞれの詩のよさについて共有した。発表の中から，それぞれの詩の感想とともに，着目点として，「目のようだ」のように例えの表現や，繰り返し，「ゴシゴシ」や「にこにこ」（オノマトペ）があり，おもしろいと発言があった。

その後，実際に詩の作成に取りかかった。生活科「大きくなった自分」とつなげて，テーマは「自分が考えていること・感じていること」にしぼった。まずは，「自分」についてマッピング法を用いてイメージを膨らませて，その中からテーマを一つ選んで作成した。2年生という今の自分を，日常の場面とつなげて書いてみようと言った。最初はなかなか書けなかった児童もいたが，詩で大切なこととして，短くてもよいこととリズムが大切なことを共有することで全員が書くことができた。

イ．相互評価コメントを行う

3つのグループ（28名を各グループ8～10名。当日欠席3名。）ごとに相互評価コメントを行った。机の上にそれぞれが作成した詩を置き，グループごとに付箋にコメントを書いていった。児童のコメントを分類すると，以下のようなものに整理される。

○字などの丁寧さについて

例・字がきれいだね

- ・けしゴムでちゃんとけしたほうがいいよ
- ・「二日たったら」の「っ」がかぎかっこに見えるから直したほうがいいよ（「」は筆者書き加え）

○字の正誤や表記の提案について

- 例・くらすはカタカナのほうがいいよ
- ・プールではクロールだけだったの
- ・せつめいではなくて，思ったことをみじかい文にしたらいいと思うよ

○内容について

例・バレエなのにゴルフをしているの

- ・「ベベ」ってなに？
- ・まけないぞという心が強い
- ・さい後「みかん」のところに，つけ足したらいいね
- ・だい名がしとあってていいね

○詩としての工夫について

例・リズムがいいね

- ・「さむいから火をつけたよ」ではなくて，「さむかった」「火をつけた」のほうがいいと思う
- ・これってなんれんなの
- ・チャプではなく，チャプチャプのほうがいいと思うよ
- ・くりかえしがあっておもしろかったよ

その他にも，太陽のことを詩に書いた友達に対して，「太ようがすきなのかな」のように書き手のことを想像しながらのコメントもあった。以下，これらの相互評価コメントのうち，有効なものがあったかどうかを分析する。

ウ．コメントを読み，推敲する

8～10名からコメントをもらい，それを読んで各自が推敲を行った（当日欠席3名）。赤で書くように指示した。この時点で推敲を行った児童は15名いた。B児は，次のように推敲をした。（下線は筆者による）

キャンプへ行ったよ
キャンプへ行った
さむいから火をつけたよ
ボーボー
つぎにまきをいれたよ
もっと火が出たよ
ボーオーボーオーボーオー
みんなあったかくなったよ
ポッカポカ

図4 B児の推敲前作品

キャンプへ行ったよ
キャンプへ行った
<u>さむかった</u>
<u>火をつけた</u>
ボーボー <u>ー</u>
つぎにまきをいれたよ
<u>火が</u>
ボーオーボーオーボーオー
<u>み</u> んなあったかくなった
ポッカポカ

図5 B児の推敲後作品

B児がもらったコメントの中でよいと考えたものに、「もっとリズムをとる。『ボーオ』ってどんなときの音?」「『さむいから火をつけたよ』ではなくて、『さむかった』『火をつけた』のほうがいいと思うよ」「音を使うのがいい」があった。このようなコメントから、推敲したものと考えられる。

エ. コメントを分類し、もう一度推敲して清書を書く

自分にとって一番いいコメントを選び、全体で共有した。視点として黒板に示したのは、以下の通りである。

詩の書き方 「いいね」	詩の内容 「いいね」
詩の書き方 アドバイス	詩の内容 アドバイス

図6 児童に示した視点

第1象限を選んだ児童は8名おり、「2時間もやっていてすごい」「そうぞうしてみると色がなくてすごい」などの詩の内容に関するプラスのコメントが挙げられた。

第2象限を選んだ児童は6名おり、「ぎもん文をかいているからいい」や「だい名が文しようとあっていいね」「音があつていいね」などの詩を書く上での形式に関するプラスのコメントが挙げられた。

第3象限を選んだ児童は8名おり、「リズムをよくすればいいと思うよ」や「もうちょっと音をかいたらよくなる」「『ます』ではなくて、『なにになにして』がいいと思うよ」などの形式に関するアドバイスが挙げられた。

第4象限を選んだ児童は6名おり、「犬もねこもいいところを書いたらいい」や「何日間手伝いをしたの?」「何人くらいでやったの?」などの内容に関する疑問やアドバイスが挙げられた。

児童が選んだよいコメントとして、形式に関するコメントを選んだ児童が第2象限と第3象限を合わせて14名、内容に関するコメントを選んだ児童が第1象限と第4象限を合わせて14名で同数となった。また、字に関するコメントについては、実際に推敲を行っていたが、一番よいコメントとして選ぶ児童はいなかった。

その後、最終的に完成作品として異なる紙に

清書した。C児は、一回目、コメントをもらった後の推敲、全体で共有した後の推敲を次のように行った。(下線は筆者による。)

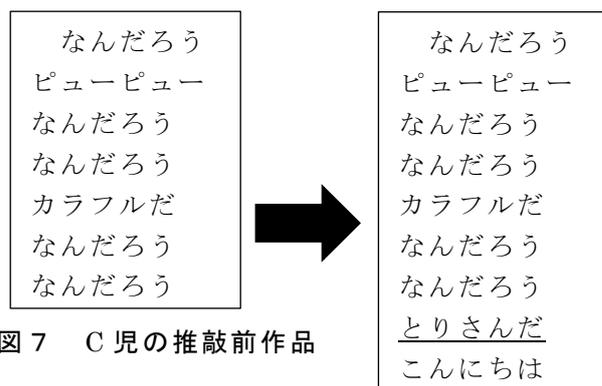


図7 C児の推敲前作品

図8 C児のコメントをもらった後の推敲

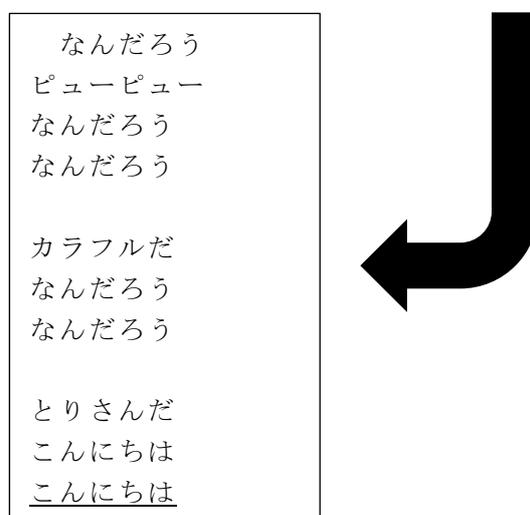


図9 C児の全体共有後の推敲

最終的に、推敲を行った児童は、28名中26名だった。推敲を行わなかった児童は、コメントにプラスのコメントしかなかった児童であった。

オ. 振り返り

C児は、ふり返りの中で、「〇〇さんのアドバイスがうれしかったです。もうちょっと長くするとどんなものかつたわることがわかりました。」と述べている。C児にとって有効だったコメントは、「リズムがすごくいい。どんなものかわからなくてとくちょうだけ書いているから、さいごに書きくわえるといいね」だった。コメントを読んだ後、「とりさんだ/こんにちは」を加え、さらに全体でよいコメントを共有した後で、さらに「こんにちは」を加えた。授業後に、なぜ「こんにちは」を2回くり返したのかを個別にきいてみると、C児は「その方がリズムがいいと思ったから」と答えた。

⑤実践を振り返って

小学校2年生という発達段階の児童にとって、友達からもらうコメントは興味深く、自分の作品をよりよくしたいという思いから、真剣にコメントを読む姿が印象的だった。C児のように、推敲した後も「リズム」について考え続け、さらに推敲する姿が学ぶ姿として現れた。誤字に関することも含めて、相互評価のコメントは、自分にとってよりよくなっていくことにつながるコメントなら有用であると考えられる。全体で、一人ひとりが選んだ一番いいコメントの共有も、推敲する上でどうすればよりよいものになるのかを考える一助となったと考える。

(2) 中学校1年生「評価コメントを用いた意見文の作成」の授業実践

① 単元について

本単元は教科書(三省堂「現代の国語1」)に載録されている「意見文」の単元である。教科書には「中心が明確になるように、段落の役割などを意識して構成や展開を考える」「根拠の明確さなどについて、読み手からの助言などをふまえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだす」と目標にある。本単元では「読み手からの助言」について着目し、「どのようなコメントが有効であるか」を意見文作成前に考える事で意見文の質的向上が見込めると考えた。

② 単元の目標

- ・伝えたい内容が読み手に伝わるように根拠を明確にして文章が書けるようにする。
- ・読み手からの助言などをふまえ、自分の文章のよい点や改善点を見いださせる。

③ 単元の計画(全5時間)

- 第1次 意見文についての学習
評価コメント要素の検討……1時間
- 第2次 意見文の作成と相互評価コメント
……2時間
- 第3次 意見文の推敲
評価コメント要素の再検討…2時間

④ 授業の実際

第1次では意見文について学習した後評価する際のコメントの要素について考えた。「どのようなコメントをするべきか」「どのようなコメントをもらいたいのか」の2つの視点からアンケート調査を行った。その際のデータを分析すると以下の7つに分けることができた。

- ・文章の目指すべき目標に沿ったコメント
(文体や文構成、タイトルに関してなど)

- ・具体的にあげるコメント
- ・自分の文と比較して考えたコメント
- ・主張の明確さに関するコメント
- ・否定だけではないよいところのコメント
- ・端的なコメント(短く簡単に改善点などを挙げている)
- ・複数の視点からのコメント

同様の意見が5人出てきたものをまとめている。(アンケートの回答数は72名)

第2次では上記の結果を共有してから意見文の作成にとりかかった。その後、小集団でお互いの意見文を読みあい、相互評価コメントを書いた。相互評価コメントに関しては1枚のプリントを用いて順々に書いていく形をとった。

第3次では第2次でもらったコメントをもとに意見文の推敲を行った。その後、自分が書いたコメント及びもらったコメントを以下の順に分析した。

- ・自分がコメントした際に7つの要素を意識したか。
- ・もらったコメントの中に要素を意識したものがあつたか。
- ・推敲する上で以下の要素は妥当だったか。
(適切であつたか)
- ・これまであげた要素以外でした方がよいと思う評価コメントとはどのようなものか。
- ・これまであげた要素以外でもらいたかつた評価コメントはどのようなものか。

以上の結果を生徒に提示し、振り返りを行った。

以下は生徒の成果物と振り返りをもとに記述していく。今回学習者D(以下Dと記述)、学習者E(以下Eと記述)を抽出する。

Dの意見文について

Dは単元前の「書くことに関する調査」にて「書いた文章を互いに読み合い、意見を述べたり聞いたりして、自分の意見の参考にすることができる。」の項目について4段階中2(あまりあてはまらない)と回答していた生徒である。推敲前

タイトル:暗黙のルールは守るべきか

推しているアーティストやアイドルに会うことが出来る機会と言え、主にライブが開かれた時だと思う。その時、ファンは新しい服を買ったり、いつも以上におめかしをしたりと、滅多にない推しに会うことが出来る機会を万全の状態で迎えようと努力するだろう。

しかし、そこである問題が出てくる。その一

例として「厚底の靴を履いてくる人がいるかいないか」という点だ。せっかく推しと会える機会なのだから、推しのことがよく見えるように双眼鏡を持っていく事が多い。だが、そこで厚底の靴を履いて身長を盛り、推しのことがよく見えるようにするのは違うのではないだろうか。

そもそも、ライブで厚底の靴を履かないのは暗黙のルールだ。その理由は大きく分けて2つに分かれる。

1つ目は、自分自身が怪我をしてしまう可能性が極めて高いという点だ。ライブハウスでは、暗い室内にすし詰め状態である。掛け声に合わせてジャンプをしたり、マフラータオルを振り回したりすることはライブのテッパンだ。しかし厚底の靴でそれを行うと、足をくじいてしまう事があるかもしれない。最悪の場合、他の人の足を踏んでしまって周りの人にまで迷惑がかかる。

2つ目は、他人に迷惑になってしまう場合が多いからだ。例えば、ライブで自分の前に立っている人が厚底の靴を履いていたとする。その人は、厚底の靴を履くことによって身長が高めな自分と同じぐらいの身長になっていた。「ライブで厚底を履くのはマナー違反だ」と注意したところ、「自分は元々の身長が低いから、このくらいなら良いだろう」と言い返されてしまった。これは、少し違うのではないかと私は思う。そんなことを言い出したら切りが無い。世の中には、自分より身長が高い人や低い人は探せばいくらでも出てくる。だから一律して「厚底の靴をライブでは履かない」というルールがあるのだ。

このような理由から、ライブに厚底の靴は履いていってはいけない。これからは「暗黙のルール」ではなく、ライブの公式が呼びかけていく必要があると思う。また、入場口で危ない靴ではないか、と確認を行うなど、大きな被害が出ないうちに厳しく取り締まっていかなければならないのではないかと。

推敲後（下線は筆者による）

タイトル：暗黙のルールは守るべきか

推しているアーティストやアイドルに会うことが出来る機会と言え、主にライブが開かれた時だと思う。その時、ファンは新しい服を買ったり、いつも以上におめかしをしたりと、滅多にない推しに会うことが出来る機会を万全の状

態で迎えようと努力するだろう。

しかし、そこである問題が出てくる。その一つの例として「厚底の靴を履いていくか、いかないか」という点だ。せっかく推しと会える機会なのだから、遠くの席であったことを考えて、推しのことがよく見えるように双眼鏡を持っていく事が多い。だが、そこで厚底の靴を履いて身長を盛り、推しのことがよく見えるようにするのは違うのではないだろうか。

そもそも、ライブで厚底の靴を履かないのは暗黙のルールだ。その理由は大きく分けて2つに分かれる。

1つ目は、自分自身が怪我をしてしまう可能性が極めて高いという点だ。ライブハウスでは、暗い室内にすし詰め状態である。掛け声に合わせてジャンプをしたり、マフラータオルを振り回したりすることはライブのテッパンだ。しかし厚底の靴でそれを行うと、足をくじいてしまう事があるかもしれない。それに厚底の靴は動きにくいので、思い切りジャンプをすることが出来ず、ライブが終わった時「もっと動きやすい格好で来ればよかった」と後悔することになる可能性もある。終わった後に楽しめなかったという気持ちが残るのは、誰だって嫌だろう。

2つ目は、他人に迷惑になってしまう場合が多いからだ。例えば、ライブで自分の前に立っている人が厚底の靴を履いていたとする。その人は、厚底の靴を履くことによって身長が高めな自分と同じぐらいの身長になっていた。「ライブで厚底を履くのはマナー違反だ」と注意したところ、「自分は元々の身長が低いから、このくらいなら良いだろう」と言い返されてしまった。これは、少し違うのではないかと私は思う。そんなことを言い出したら切りが無い。世の中には、自分より身長が高い人や低い人は探せばいくらでも出てくる。だから一律して「厚底の靴をライブでは履かない」というルールがあるのだ。

このような理由から、ライブに厚底の靴は履いていってはいけない。しかし、厚底の靴を履いてくる人がいるのが現状だ。これからは「暗黙のルール」ではなく、ライブの公式が呼びかけていく必要があると思う。また、入場口で危ない靴ではないか、と確認を行うなど、大きな被害が出ないうちに厳しく取り締まっていかなければならないのではないかと。

D の原稿を比較すると下線部分が追加されている。D の原稿に寄せられたコメントには「理由が簡潔でわかりやすい」「実体験があることでわかりやすい」などがあつた。また、「ライブのルールを知らなかったが、よくわかつた」というコメントも散見され、それらの部分から「遠くの席であつたことを考えて」という部分や「誰だつて嫌だろう」といったライブのことを知らない読み手への配慮や共感を求めた文に推敲したことが考えられる。D は単元終了時の振り返りで「今回は友だちの意見を聞いてより良い意見文になるようにする事ができました。意見文を書くことはあまり得意ではないので、読みやすいように書いたり、自分の意見をどのように主張するのが難しかったのですが、友達の意見などを元に書き直すと良い意見分が書けたと思います。」と記述している。さらに、単元最初にとつた調査では2（あまりあてはまらない）であつた項目は単元終了時に3（ややあてはまる）肯定的回答へと変化していた。

その他生徒の振り返りの中には「自分の意見につなげるためには、自己主張中心ではなく、その他の考えも取り入れることが大切だつた。」「自分はあまり改善したほうが良いというコメントが少なかつたので1つのコメントの意味をしっかりと理解して文章を直すことができました。」などの記述も見られた。以上の例から意見文の作成において「相互評価コメントの要素」を共有した実践は一定の効果を挙げたと考えられる。実践前に行われた調査で「書いた文章を互いに読み合い、意見を述べたり聞いたりして、自分の意見の参考にすることができる。」の項目で4段階評価中4と答えた生徒が43.6%であつたのに対し、実践後の調査では同質問で55.9%に増加している。そのほかの記述に対する質問でも肯定的回答率が向上している。

しかしながら課題として以下のEのような事例が散見された。Eは単元前調査にて「書いた文章を互いに読み合い、意見を述べたり聞いたりして、自分の意見の参考にすることができる。」の項目について4段階中4（あてはまる）と回答していた生徒である。

推敲前

タイトル：校則

学校にはスマホを持ってきてはいけないという校則がある。しかし、私はこの校則を無くして、学校にスマホを持ってきても良いというこ

とにすべきだと考える。

そう考える理由は2つある。

1つ目の理由は緊急時に連絡が取れるからだ。先日、災害について家族と話し合つた。その中で「もし学校にいる時や登下校中に災害が起きたら」という話題があつた。実際、学校にいる時や登下校中に災害が起きたら私は安全な場所に逃げたあと、家族と連絡を取りたいと思うだろう。他にも、事件・事故や犯罪に巻き込まれてしまつた時、家族と連絡をとることが必要だ。

2つ目の理由は時刻の確認が出来るからだ。学校で委員会などがあつて予定よりも帰る時間が遅くなつてしまうと、バスや電車を利用して人は自分がいつのバスや電車に乗るのが分からず、不安になる。しかし、スマホがあるとバスや電車の時間を調べることができ、安心すると思う。

だが、学校にスマホを持ってきてはいけないという校則にも理由がある。それは、授業中にスマホを触つてしまい、勉強に集中できなくなるから、登下校中に歩きスマホをする人が出てしまうかもしれないから、友達同士のトラブルが起きる可能性が高まるから等々だ。しかし、学校内ではロッカーに収める、バスや電車の時間を調べたいときは登下校中ではなく、学校で先生が見ている時に使う、友達同士でスマホの貸し借りをしないなどルールを決めると良いと考える。

以上のことから、学校にスマホを持ってきてはいけないという校則を無くして、学校にスマホを持ってきても良いということにすべきだと考える。

推敲後（下線は筆者による）

タイトル：校則

学校にはスマホを持ってきてはいけないという校則がある。しかし、私はこの校則を無くして、学校にスマホを持ってきても良いということにすべきだと考える。

そう考える理由は2つある。

1つ目の理由は緊急時に連絡が取れるからだ。先日、災害について家族と話し合つた。その中で「もし学校にいる時や登下校中に災害が起きたら」という話題があつた。実際、学校にいる時や登下校中に災害が起きたら安全な場所に逃げたあと、家族や友達と連絡を取りたいと思うだろう。他にも、事件・事故や犯罪に巻き込ま

れてしまった時、家族と連絡をとることが必要だ。

2つ目の理由は時刻の確認が出来るからだ。学校で委員会などがあると予定よりも帰る時間が遅くなってしまうと、バスや電車を利用して人は自分がいつのバスや電車に乗るのが分からず、不安になる。しかし、スマホがあるとバスや電車の時間を調べることができ、安心すると考える。

だが、学校にスマホを持ってきてはいけないという校則にも理由がある。それは、授業中にスマホを触る人が出てきてしまい、勉強に集中できなくなるから、登下校中に歩きスマホをする人が出てしまう可能性があり危ないから、友達同士のトラブルが起きる可能性が高まるから等々だ。そのような時は、学校内や授業中はロッカーに収める、バスや電車の時間を調べたいときは登下校中ではなく、学校内で使用してもよいか先生の許可を貰い先生の前で使う、友達同士でスマホの貸し借りをしないなどルールを決めると良いと考える。

以上のことから、学校にスマホを持ってきてはいけないという校則を無くして、学校にスマホを持ってきて良いということにすべきだと考える。

Eの原稿を比較するとほとんど変更がみられないが下線部に変更が見られる。Eに寄せられたコメントには「例を用いて説明していて分かりやすかった」「メリット・デメリットが両方書かれていて説得力があった」などが多くあった。それらから細かい文言が修正されたと考えられる。また、「もってくる際の校則が具体的でよかった」とのコメントがあり、「学校内で使用してもよいか先生の許可を貰い先生の前で使う」といった言葉が加えられたのだろう。

しかしながら、単元前では4（あてはまる）であった「書いた文章を互いに読み合い、意見を述べたり聞いたりして、自分の意見の参考にすることができる。」の項目が3（ややあてはまる）に下がっていた。Eは振り返りで「もらったコメントの中に直したほうがよいところが無かったから、文章をより良くするためにアドバイスをしてほしかった。」と記述している。また、単元終了時の「もらいたかったコメント」に「具体的な改善案」という要素がいくつも出てきた。

以上のことからわかる課題として指導時の

声かけが考えられる。本単元以外でコメントをする際に「改善点だけでなくよいところを伝えてから」という指導をおこなってきたことが原因の1つと考えられる。実際に生徒の振り返りの中に「意見文の感想の交流をする前は、直したほうが良いところよりもいいところをたくさん書くほうが良いと考えていたけれど、いいところばかりを書いてくれていても文章をよりよく改善するのが難しかったから」などの記述も見られた。

また、評価コメントに必要な要素として「自分の文と比較して考えたコメント」が挙げられていたが、実践後の調査では「コメントの際に意識した」のが65.7%「もらったコメントの中にあつた」と回答したのが34.3%と、あまりこの要素に適したコメントが見られなかった。さらに、以上のように「コメントする際の意識」と「もらうコメントの意識」の乖離がいくつか見られた。

⑤実践を振り返って

今回の実践では、「有効なコメント」の要素を意識したコメントを行うことで意見文の質的向上だけではなく、生徒の意識の向上が見込めることがわかった。中学生となったと今、自らが紡ぐ言葉の重要性に改めて気づかせることができたのではないだろうか。今後は「有効なコメント」の要素の再検討を行い、要素をどのようにコメントに表していくか国語科だけではなく横断的に実践をしていくことを通して、相互評価コメントの質的な向上を目指していきたい。

4. 成果と課題

小・中学校の実践を整理することで、相互評価コメントの際に「有効なコメント」を生み出すための手立てについて成果と課題が見えてきた。

本研究の成果として、小学校低学年の児童が、相互評価コメントをどのように捉え、活用するのかを明らかにしたことがあげられる。低学年の児童は、相互評価の経験が乏しく、どのようなコメントをすることがよいのか考えることが難しいという実態があるが、本稿であげたような経験を積み重ねることで、相互評価における必要な要素を学んでいくことができるであろう。また、相互評価を行うことは、各自の文章の質的向上のみならず、小・中学校でともに意欲の向上につながっているという結果が得られ

た。

一方で、本研究の課題としては、小学校低学年以降から、小学校高学年にかけての実践例が不足しているということがあげられる。小学校3年生から6年生にかけての実践を蓄積し、相互評価において「有効なコメント」を導くための手立てや教材、児童・生徒が考える「有効なコメント」の要素について系統性を探っていくことが今後の課題となるだろう。

引用（参考）文献

- 1) 秋田喜代美 (2019)『これからの質的研究法～一五の事例にみる学校教育実践研究』東京図書株式会社.
- 2) 有木大輔, 澤田英輔, 杉村千亜希, 関口隆一, 千野浩一, 東城徳幸, 平田知之 (2019) 「国語科の授業における、生徒同士の相互評価・相互批評の実践と研究-その二-」『2018 筑波大学附属駒場論集 58 集』 pp.4-10.
- 3) 黒田裕太郎 (2022) 「児童・生徒の相互評価コメントの質的向上のための国語科授業の開発—児童・生徒にとっての有効な相互評価コメントとは—」第 74 回中国四国教育学会発表資料.
- 4) 田中宏幸 (2022) 「ICTを活用した日本語文章表現指導の開発—相互評価におけるICTの活用—」『安田女子大学紀要 50』 pp.1-10.
- 5) 難波博孝・山元隆春・谷栄次 (2019) 「詩とイメージーションの教育 理論と実践」明治図書出版株式会社.
- 6) 西村尚久・黒田裕太郎・坂田豊 (2021) 「テキストコミュニケーションを用いた国語科授業の開発」『国語教育研究第 62 号』広島大学国語教育会, pp.27-37.
- 7) 野地潤家 (1974)『話ことば学習論』共文社.